

日本武道に見られる思想の研究（その4） －日本武道における「礼」の一考察－

ビットマン ハイコ

はじめに

現在、国際的に幅広く普及を果たしている日本武道ではあるが、全く文化環境の異なるそれぞれの国々の修行者からすれば、容易には理解しがたいいくつかの壁を有していることも事実である。その一つが「礼」をめぐる問題である。伝統的な日本武道の一つを修行すると、多くの場合、遅かれ早かれ、その中に存在する「礼法」即ち「礼儀作法」と直面することになる。例えば、「先生に礼」あるいは「お互いに礼」といったこと自体にとまどう人々もいる。特に初心者段階では、「礼」は“体を曲げる儀式”であり、握手などといった“挨拶の仕方”に慣れ親しんできた場合には、かなり異質なものとして目に映るかもしれない。また、それぞれの宗教的立場から、「礼」をきちんと説明をしないまま、“人に礼を行う”時には、これを拒む人もいと見聞したことがある。

筆者は、留学生を含む多くの人々と一緒に武道をやる機会があるが、なぜ「礼をする」のか、なぜ「礼法」即ち「礼儀作法」は、日本武道を修行することに欠かせないのか、という質問に対しては、なかなか明確に答えにくいと感じている。また、一般に指導者が、「礼」についてあまり具体的な説明をしないことが多いのも現状であると思う。しかし、日本武道の修行にとって「礼」は本質的なものであり、またそのことの意味と重要性を明確に説明することが不可欠だと考えている。

武道文献には、「礼に始まり、礼に終わる」という格言をしばしば見かける。だが、最近の武道の試合を見ていると、形式的な「礼」に終わっている場合が多く、しかも形さえ崩れて、「礼を正しく行う」意識はきわめて希薄であるようにすら見える。またしばしば試合終了時に勝者によるガッツポーズがごく当たり前のように行われているのも見かける。

そこで今回は、なぜ「礼」をするのか、なぜ「礼」は武道にとって大切なのか、という観点から「礼」の意味を追求してみたい。

「礼」の概念試論

空手道を例にあげてみよう。例えば、松濤館流の父と言われている富名腰（船越）義珍の『空手二十箇條』は、その第一条が、「礼」を強調する「空手は礼に始まり礼に終る事を忘るな」から始められている¹。また、この格言は流派を超え、その類似的な言い方を含めて、さまざまな空手道文献に見られる（Bittmann, 1999, 294頁を参照）。

さて、この「礼」という概念はいったいどのような意味を持っているのであろうか。まず、その基本的な意味合いについて、岸野雄三は次のように述べている。

「礼は旧字体で禮と書く。許慎の『説文解字』によれば、礼は履の意味であり、人として踏み行う道であり習慣である。礼は『示』と『豊』とからなり、神を表す『示』と、祭器を表す『豊』とから作られている。したがって、元来、『礼』は祭祀と深く関係し、神に仕え、神を祭るために踏み行うべき道であったと言えよう。…このように礼は宗教的儀礼から出発し、次第に洗練されて社会的規範に発展するが、他方では強制と制裁が伴う法律とは一線が画されている」（岸野, 1991, 3頁）。つまり、「礼」とは押しつけや強制が伴う法律でもなく、宗教的な深さに淵源する人間の踏み行う道が習慣化されたものである。

日本における礼法を歴史的に見ると、武家政権の時代以前から中国古典礼書の影響を受けてきたが（山根, 2004, 57頁）、武道の「礼」はもとより、今日に至る日常の礼儀作法に深くかかわってきたのは小笠原流であった。小笠原家は足利将軍家の弓馬術師範とされ、室町時代に弓馬術界の規範的存在となった。また、足利将軍家から命を受けて諸礼の法式の整備確立にもかかわった。徳川時代には将軍家の弓馬礼法師範を勤めて、次第に武士階級に大きな影響を与え、弓馬礼法ならびに諸礼法の宗家として現在まで及んでいる（二木・入江・加藤, 1994, 33～34及び41～42頁）。

このように、武道の歴史と礼法は強い関わりを持っているのだが、空手道のみならず現在の武道全体に共通する「礼に始まり礼に終る」という「礼」に関する格言はいつ頃から言われているのだろうか。その出所に関して、中村民雄は次のように述べている。

1 慶應義塾空手研究会（1930）『こぶし』、1頁。この『空手二十箇條』はいつ著作されたのかは、明確ではないが、「慶應義塾空手研究会」1930年11月27日発行の『こぶし』という会誌の創刊号には掲載されている。また、今日に至るまで、『空手二十箇條』は全体あるいは格言別に、多くの文献に引用されてきた。空手道においては、教えに関するもっとも著明な書物であると考えられる。

「江戸時代から武術は礼儀を重んじるということが説かれてきたが、『礼に始まり礼に終わる』ということばはなかった。…このことばの初見は、内藤高治が『剣道初歩』(『武徳誌』第二篇七号、明治40年7月)で、礼について解説した中に、『武術の講習は總て礼に始まり礼に終るを以て肝要とす』と述べられているのが最初のようなのである」(中村、1994、331頁)。

これによれば、武道と「礼」の長い歴史的なかわりの中で、「礼に始まり礼に終る」ということば自体は比較的新しい格言のようであるが、現代の武道修行者にとってはもっとも基本的格言の一つとして、世界中に知られ、定着しているのが、この「礼に始まり礼に終る」である。

また、岸野雄三がいうように「日本の『礼』は『儒教の礼』として中国から摂取消化した用語であり、『礼』は儒教を無視しては考えられない」(岸野、1991、2頁)。つまり、「礼」は日常生活の中に倫理的・道徳的規範として長年にわたって用いられた儒教的基本道徳「五常(仁、義、礼、智、信)」の一つである。だから「礼」は単なる形式的な挨拶や上半身を曲げるお辞儀だけではなく、前に述べたように、内面的な心の表れでなければならない。武道に限らず、日本の礼法に大きな影響を与えてきた小笠原家の小笠原清信は『しつけの事典』の「指導の要点」として次のような心の持ち方を求めている。

「礼は、相手を尊敬する心の表現としておこなうものである」(小笠原、1985、59頁)。

おそらく、前に述べた富名腰も『空手二十箇條』を著作された時、自然に人間生活に影響を及ぼす「五常」を意識しながら、このように考えておられたのではないかと思われる。また、神道揚心流柔術四世であり、和道流空手道開祖である大塚博紀も次のように述べている。

「…武道は礼に始まって礼に終るといわれて礼儀を重んずる。武道の礼儀は相互に人格を尊敬する心が形となつての現れである。その尊敬心は愛の心から生ずる。その礼儀の作法は単なる形式ではなく愛より発した尊敬心の正しく表現されたものでなければならない。さらに武道の礼儀作法は品位と共にその一挙一動に寸分の隙がなくいつ如何なる場合にも直にその姿勢に応じて如何様にもでも体勢の変化が可能なる作法であることが普通の礼儀作法と違うのである。常住坐臥この作法の鍛錬によって心に緩みのない精神が鍛えられるのである」(大塚、1970、8～9頁)。

すなわち、武道の場合、「礼」とは、師を尊敬し、師は弟子を慈しみ、共に修行を積む者は相互に敬愛し、一緒に稽古や試合に励んで互いに「心技体」の向上を目指そうとする、ある意味での共同の「約束ごと」である。いうまでもないが、武道においては

その練習の場合であっても「相手」いわゆる「敵」を制することが大切な目標になっている。しかし、相手や仲間と一緒に練習に励むことや助け合いがなければ、あるいは相手と一緒に試合をすることがなければ、即ち単なる「殴り合い」の領域を超えなければ、武道修行を通じて「技」と「体」の向上も、「心」いわゆる「人間性」の向上も目指すことはできない。言い換えれば、「心技体」の統一した働きも発揮されない。だからこそ「礼」は武道の本質として欠かせない、一つの根本的・道徳的本質要素なのである。

しかし、このような理想に対して、武道の試合にあっても、近年特に相手に対する「礼」が乱れているように見受けられるのである。例えば、試合の始めと終わりに、相手が目の前にいるのに、相手がいないかのような「礼」の姿がしばしば見られるのはその一つである。いわゆる単なる頭を下げ、「礼」を形式的に行っているに過ぎない。相手に対する尊敬の念を持つどころか、「礼」そのものの意味が理解されていないのではなかろうか。これは勝敗だけにこだわる過ぎる傾向と無関係ではないだろう。試合に勝つために、精一杯の努力をすることは当然であるが、だからといってそれのみに気を取られ、相手に尊敬の念を持った礼をしない理由にはならない。もともと、それは若い選手だけの問題ではなく、長い経験を持ち「礼」の意味を熟知しているはずの指導者の問題でもある。山根一郎がいうように「…礼法の奥義は、それにふさわしい者が口伝として対面で継承されるものであり、また所作の仕方は正しい所作を実地で訓練することによってはじめてその意味が非言語的に体得される」（山根，2004，59頁）ものであるから、弟子にとってモデルとしての役割を果たさねばならない師は礼の作法においても大きな責任を持つ。

また、試合終了時の勝者によるガッツポーズも「礼」の精神に悖るように思われる。勝者がこれを行うことによって、相手は敗者の悲哀に加えて、勝者からのさらなる屈辱感を味わわせられていることになる。それでは「礼」あるいは「武道は礼に始まり礼に終る」という精神はどこに消えたかと言わざるを得ない。せつかくのすばらしい礼の「約束ごと」があるのに、これは無視される一方である。反則や罰則規定の有無にかかわらず、武道の場合は「礼」の精神を忘れないように心掛けなければ、歴史的な伝統文化とはいえないであろう。

まとめ

武道に限らず、勝利は誰にとってもうれしいことである。その率直な心情を身体で表現することは人間として自然であるかもしれない。だが、特に武道の場合、相手と

格闘で争うもので危険も伴い、自分のことだけを考えるのではなく、一緒に競ってくれた相手の存在に感謝し、勝者としての喜びを抑制しながら、相手の心情を思いやるところに「礼」の意味がある。多くの場合勝敗のみにこだわるスポーツ的な試合と違って、そこに「礼」が現代武道文化の不可欠な本質的要素として生きてくるように思う。武道修行の中で、このような「礼」の在り方を心がけると、相手に対する尊敬の念や礼儀作法が自然に身につく、あるいは人への思いやりが生まれてくる。競争社会といわれる現代社会に欠けているのはまさにそのことではないのだろうか。

「礼」を無視した指導方針や修行者自身の態度・努力からは、「武道憲章」²の第一条に書かれている「武道は、武技による心身の鍛練を通じて人格を磨き、識見を高め、有為の人物を育成することを目的とする」（二木・入江・加藤，1994，222頁）という武道の目的は達成することはできない。「礼」は武道においては、相手を思いやる「礼」の重さを教えているのではないだろうか。だから「礼」という儒教的基本道徳は、武道修行にとって一つの重要かつ欠かせない倫理的修行要素なのである。

【参考文献】

- 今村嘉雄（1966）『日本武道全集』，人物往来社。
- 小笠原清信・白石暁（1968）『写真と図解による弓道』，大修館。
- 小笠原清信（1985）『完全図解しつけの事典』，東陽出版。
- 大塚博紀（1970）『空手道第一巻』，大塚博紀最高師範後援会。
- 岸野雄三（1991）「儒教の古典と「礼」（その1）」，『国際武道大学紀要第7号』，国際武道大学，1～13頁。
- 慶應義塾空手研究会（1930）『こぶし』創刊号，慶應義塾空手研究会。
- 新村出編（1998）『広辞苑』第五版，岩波書店。
- 藤堂明保（2000）『学研 漢和大事典』，学習研究社。
- 中村民雄（1994）『剣道事典・技術と文化の歴史』，島津書房。
- ビットマン ハイコ（1997）「空手道の歴史と「教え」について」，『東北アジア体育・スポーツ史学会組織委員会，東北アジア体育・スポーツ史学会第2回大会抄録集』，東北アジア体育・スポーツ史学会組織委員会，439～449頁。
- Bittmann, Heiko. *Karatedō - Der Weg der Leeren Hand. Meister der vier grossen Schulrichtungen und ihre Lehre. Biographien - Lehrschriften - Rezeption.* Ludwigsburg und Kanazawa: Heiko Bittmann, 1999.
- ビットマン ハイコ（2005）「私が学んだ武道の名著から・第3回 空手は礼に始まり礼に終る事を忘るな」，『月刊武道』6月号（通巻463号），日本武道館，56～59頁。
- Bittmann, Heiko. *The Teachings of Karatedō.* Ludwigsburg and Kanazawa: Heiko Bittmann, 2005.

2 1977年に設立された武道団体の統一組織としての「日本武道協議会」が、1987年にこの「武道憲章」を発表した。

- 二木謙一 (1985) 『中世武家儀礼の研究』, 吉川弘文館。
二木謙一, 入江康平, 加藤寛 (1994) 『日本史小百科・武道』, 東京堂出版。
富名腰義珍 (1935) 『空手道教範』, 大倉廣文堂。
摩文仁賢和, 仲宗根源和 (1938) 『空手道入門 (別名空手術教範)』, 京文社書店。
宮城長順 (1934) 『唐手道概説』, (手稿)。
山根一郎 (2004) 「中世武家礼法における中国古典礼書の影響」, 『椋山女学園大学文化情報学部紀要第4巻』, 椋山女学園大学文化情報学部, 57~73頁。

The "Respectful Salutation" (*rei*) in the Japanese Ways of the Martial Arts

Heiko BITTMANN

It is often said that in the traditional Japanese Martial Arts respectful manners have been esteemed since ancient times. For example one of the important precepts for training in Karatedô is: "The Way of the Empty Hand begins with a respectful salutation and ends with a respectful salutation" (*karatedô wa rei ni hajimari, rei ni owaru*). However, this precept is not only limited to this martial art, it can also be found within other Japanese martial arts.

When analyzing this precept, we can find the influence of the Confucian Cardinal Virtue *rei* (Chin. *li*), usually translated as 'propriety'. However, when the same word is used to indicate the *rei* performed within the practice of Japanese martial arts, it can be translated as 'respectful salutation', a combination of two possible translations, 'respect' and 'salutation'.

The aim of this presentation is to shed light on the meaning of *rei* in the practice of the Japanese Ways of the Martial Arts (*budô*).